

ゲーアハルト・ハウプトマン 「オットー・ブラームの葬儀に際しての弔辞（1912年12月1日）」¹⁾

Gerhart Hauptmann, «Rede am Sarge Otto Brahms, gehalten am 1.Dezember 1912»(1912)

ここに横たわっているのは、私が失ったはじめての友人でもなく、世界が失うはじめての偉人でもない。そもそも誰かを失うということは、あとに残される者にとっていつも深く謎めいた出来事であり、予期せぬ不意打ちであり、心に混乱と痛苦を引き起こすものであります。

それゆえこうして、ほんの少し前までその現在を十全に生きていた者を前にして話をしていると、私は自分という存在の一部が引きちぎられ、その傷口がいまだ開いたままなのを感じます。そして今、はっきりわかるのです。私の魂の大切な部分が、いかに彼と結びついていたか。それが断ち切られることで、私の魂はいかに傷つき、損なわれたか。私たちを結びつけていたのは、内面の同質性と、外部のさまざまな状況でした。彼の作品は私の作品の一部であり、私の作品は彼の作品の一部であったのです。

ほぼ20年にわたって、内面的にも対外的にもこの人生という奇妙な戦いのなかで私たちは支え合ってきました。闘いつつ、一步、また一步と、地歩を固めてきたのです。立場を同じくする戦士たちに囲まれながら。そして戦いのなかでの結びつき以上に私たちの結束を高めたもの、それは、あえて言わせていただければ、「理想」です。我が友人であるこの男は、真の意味でのドイツ的理想主義者でした。彼の人となりをイメージで表現するとすれば、理想の旗印を高々と掲げている姿、でしょうか。担い手がその旗印を手放さず死守していさえすれば、ときによろめき倒れそうになろうとも、それは不名誉なことではありません。そして、ここに横たわる彼は、その旗印をしっかりと持ち、決して投げ捨てようとはしなかったのです。

ここにおいでの方々はみな、彼をよくご存じのことでしょうから、今私が申し上げたことに対して証拠立てをする必要はないと思います。この価値ある男は、理想主義のドイツの性格をとりわけ体现していた。それはあいまいな理想主義ではありません。土台のしっかりした、

思慮と分別に担われた、勇気と根気が一体となった、理想主義です。ドイツの演劇史において、実践の力と理念の力がこのように結びついた例は、彼以前にはありませんでした。彼は演劇を真摯で、真正で、生命力のある芸術へと引き上げたのです。それまでにはまったくなかったやり方で、彼は演劇を人生に、人生を演劇に接近させました。ブラームが体现していたもうひとつのドイツ的特質は、賞賛されること多くして実際に会おうことの少ない、ドイツ的な信義です。彼はものごとに対して誠実を保ち続けただけでなく、人に対しても信義を保ちました。彼を知るここにおいでの方々は、よくご存じのことでしょう。彼は信義のためには弱さも受け入れ、ふらつく者、躓く者、臆病な者にも肩を貸したのです。

それは決して楽な歩みではありません。彼の仕事は労苦に満ちたものでした。ドイツ演劇の尊厳のための戦いなど重要ではないと見なす人びとには、彼の真摯さは見えないでしょう。彼の功績は、自らの重要性を理解し、自分自身をその戦いのために賭したことです。それゆえ彼はあらゆる種類の心配事や苦労、責務を自らに背負い込み、合戦へと打ちいで、勝利と敗北、成就と失望を経験し、平穏な市民が安逸のなかでおくる生活などとは無縁でした。祖国の運命をその手に握る秀でた政治家の持つ責任感をさえ、凌駕するとも言えましょう。それは大量の仕事と、粘りと、思慮と、そして大胆さを必要としたのです。

ここに横たわる彼は、その真の文化闘争を正々堂々と勝ち抜いてきました。彼自身の抱く名誉はこの戦いの中にあり、彼の感じた満足は、ドイツの文化的財産を増やしたのだという自負の中にあり、その他の外的な栄誉など、斟酌しなかった。しかしまさにそれゆえに、ノルウェー王はこの精神の騎士^{リッター}を、ドイツ精神の騎士を、聖オラフ勲章叙勲者の列に加えたのです。

そういう彼に対して、どのように敬意をあらわせばいいのでしょうか。彼のアクチュアルな活動を引き受け継

1) [訳注] 翻訳に際しては以下を底本とした。Gerhart Hauptmann *Sämtliche Werke, Band IV, Erzählungen Theoretische Prosa*, Propyläen Verlag, 1963, pp. 701-702.

続し、その活動の重要性を、鑑賞者のより深いところまで届けることでしょう。彼は芸術と民衆の融合を高い水準で成し遂げました。彼において演劇は、民衆の魂のいわば呼吸器官となったのです。傍流にあったものに、民衆や世事とは無縁だったものに、自ずから発揮すべき力を与えたのです。

我らが愛するブラーム、君がドイツの様式と芸術のために献身的になしたことすべてに対して、僕たちは感謝します。そして僕自身は、一度たりとも揺らぐことのなかった君の篤い友情に心からの礼を言います。さらば、価値ある男よ、我が友よ、さらば！

（訳：本田雅也）